

先づ本種の被害例である。私の知つて居る所では二つ有る。

(1) 大正九年愛媛縣上浮穴郡川瀬村大字畑の川民有ヒノキ造林地二町歩に發生した。内七反歩では被害甚しかつた。樹齡二十年で、樹高三乃至四間胸高直徑三乃至四寸である。

(2) 大正十年山梨縣東山梨郡大藤村字萩原山小字野毛澤恩賜縣有林内のヒノキの單純林に發生した。又附近の庭園なぎにある木も害を受けた。山梨縣からの報告によるに、大正十年から十五六年前にも庭園のカマクラヒバに同種の被害を見た事があるに云ふ。然し其は確かに同種であつたか否かは今明かではない。

次に此の種の食ふ樹種のここである。長野氏は已に本種がビヤクシンを食ふ事を報告されて居る。桑名、田中兩氏によるにビヤクシンの他にハイビヤクシン(ソナレ)ヒバを食ふに云ふ事である。

私の知り得た所に依るに次のやうである。

(1) ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa*) (山梨縣及久萬小林區署の報告及び自分の飼育による。)

(2) カマクラヒバ (*Ch. obtusa* var. *breviramea*) (山梨縣の報告による。カマクラヒバの類はヒノキの變種で、其の他種々園藝品種なぎもある。多くは何々ヒバの名で呼ばれて居る。

(3) ネズミサシ(*Juniperus rigida*) (山梨縣報告に據る)

私の考から申せばヒノキ、カマクラヒバ(或はヒバの種々の品種)、ネズミサシ、ビヤクシン、及ハイビヤクシン即 *Chamaecyparis* 及 *Juniperus* 二屬が本種の嗜食する植物であらふに思ふ。只兩氏の報告されたヒバ普通に吾々の云ふアスナロを食ふ事は飼育の際に食つたに云ふに止まつて、野外では好んで食ふのではあるまいに考へる。是は私の兼ねて云ふ食性の問題から想像する處である。

### オホツアカリの分布 (矢野宗幹)

蟻の中には兵蟻といつて職蟻を比較して格段に大形なものゝ居るものがある。

る。其中で日本で普通に見られるものは *Pheidole* 属であつて茲に云ふオホゾアカアリと云ふのは其の兵蟻の著しく大きな頭部からまつた名である。此の属は非常に種数の多いもので、殊に熱帯地方に行くに従つて数を増す。内地には其に四種あつて、内二種が普通である。一つはオホゾアカリ、(*Pheidole nodus*)で、一つはアヅマオホゾアカリ (*Pheidole fervida*) である。他の二種は稀であつて私が只標本を得たのみである。アヅマオホゾアカリは東部に居ると云ふ意味で、私の知つて居る所では、東京附近のは凡て是であり其から北は此の種である。オホゾアカリの方は九州には普通であり、本州でも山陽道には所々に採つた。私は其が東の方に何處まで来て居るかを調べて見たいと思つて居るが未だ充分に採集した事がない。伊豆の西海岸に行つた時には多少注意したが其を得なかつた。本年八月千葉縣下を歩いて天津町の帝大清澄演習林の事務所にまつた時に僅かな時間があつたので天津の町の所々を注意して見た處、ある寺の境内ではからずもこの *Pheidole nodus* の巢を見出した。

この蟻は私にまつては思出の多い蟻である。何故ならば私の産れた小倉の在ではこの種の繁榮區域で、自分の内の庭には幾つかのこの巢を見出す事が出来る。この巢の近くに小さな昆蟲とか葉子の一片を置くまもなく其の一疋がこれを見出す。若し一疋で動かし得れば兎に角、そうでないま直に自分の巢に走る。其の蟻が巢の口を入つたかと思ふま同時に巢の中からは流れ出る様に蟻の群が走り出て其の見出された食物に向ふ、其の澤山の職蟻の中には大兵肥満の兵蟻が混じて居る。其を大將と云つて居た。食物に集まるま直にその獲物を搬び始める。

蟻は食物を見出した場合、自分の巢に通信に歸るのが普通と云つてもよいであらう、けれども此の種のやうに活潑に敏速に、巢に通知し、又食物に走りつき、運び歸るものはない。同じ属でありながらアヅマオホゾアカリではそうはゆかぬ。形も小さいが甚だ敏速でない。この點が私の小兒心に離れないで、今でも時々蟻に食物を與へて見るが、他の蟻ではオホゾアカリの様な面白味が起らないのは、必ずしも幼なじみと云ふ事ばかりではあるま

い。ラボツクの蟻の本を見ながら蟻の方向に對する本能を實驗して見たのも實はこの蟻であつた。他の蟻との關係を知らふと多くの犠牲者を出したのも實はこの種であつた。

斯様な思出のある種に偶然、然し實は會はれそうなものだと云ふ多少の豫期をもつて房州の海岸を注意したのであるが、今日のあたり其の種を見て獨り喜んだのは、何も幼なじみに會つたこと云ふばかりではない。外房州に棲息するところが分布上有り得べきものと思つて居たからである。私はこの種の分布をも少し的確に知りたい。私の想像をもつてすれば、伊豆半島、伊豆七島、沼津以西の東海道の海岸地方などはこの種の繁榮區域でなければならない。其のアヅマオホヅアカアリと棲息區域との堺はどんなになつて居るであらうか。私はこの點について讀者の御助力を得たい。

### キアシドクガの食樹（矢野宗幹）

キアシドクガ一名ミヅキノシロテフがミヅキを食ふ事は誰しも知つて居る事で、東京附近では特別にその發生が多いので目につき易い。この種が、ハクウンボク、エゴノキ等を食ふやうに書いた本があつたかと思ふが決してそう云ふ事はない。發生の多い時には葉を食ひ盡した幼蟲が木から降り食を求めて匍ひ出し、四周の木に登つて行くが、決して他の木の葉を食つたのを見た事がない。只同屬のクマノミヅキの葉は食ふが、それもさうもミヅキを食ひ盡してからではないかと思ふ。ある時見なれない木の葉をこの毛蟲が食つて居るの見出したので不思議と思つて調べて見るに、それは北亞米利加産の同屬の木 *Cornus circinata* と云ふのであつた。郷土を同じくして居る日本産の近似の屬の植物をも食はないのに遠國の木でも同屬の木であれば食ふ所に面白味がある。

キアシドクガが卵を産む時はさうであるかと思ふに必ずミヅキの幹である、其以外の木は決して産まない。若し産んだものを見出したらば、それはミヅキの枝にさりかこまれて居る時であらふ。枝葉に取りまかれて居る爲めにつひ思ひ誤まつて産んだと思ふ場合である。曾て私は斯様な場合を見た。